

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：33906

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20700571

研究課題名（和文） 家族および家庭における日常行動が学習意欲の形成に及ぼす影響

研究課題名（英文） Influence of everyday activities in family life upon cultivating eagerness for study.

研究代表者

室 雅子（MASAKO MURO）

椋山女学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：50329645

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的はどのような家族の行動が子どもの教科への興味を高めたのかを明らかにすることである。結果、親が自分の興味があることを子どもと一緒に日常的に行い、知識や技術を習得する楽しさを伝えることが、子どもによい影響を与えていた。また、興味関心の形成と持続には本人の持つその学習内容への到達目標意識が影響しており、その到達目標は具体的なイメージ形成、生活への必要度、頻度と刺激、家庭内資源・文化資本、対象が実技か鑑賞か、内容への高尚意識、仕事への連動等のイメージが関わっていると分かった。これらをどう家族が働きかけた上でさらに知識の習得に好印象を与えるかで学習意欲が影響されると考えられる。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research was to clarify what kind of family activities stimulated their children's interest in school subjects.

As a conclusion of this research, it can be said that family activities influenced on their children's interest in school subject. It gave a good influence to children that parents enjoy their own hobbies with their children and convey the pleasure of acquiring new knowledge and technique. And the goals for subjects stimulated children to further efforts. And the goals for subjects stimulated children to further effort. The goals were influenced by subjects' contents' image, necessity, frequency, stimulus, material resources at home, usefulness, and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	100,000	30,000	130,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：家族関係・家庭内教育

1. 研究開始当初の背景

学校における生徒の学習意欲に関する研究は、意欲そのものに着目した心理学的研究や、生きる力として身につけるべき能力から指摘された研究、また実践的な授業研究や教材研究等は国内外において枚挙に遑無く、見解も様々である。一方でこれらの研究は「学校の中で」いかに教員が子どもに関心を起こさせるか、という学校内での行為に着目したものが多く、日常知としてすでに学習内容に関心を持っている子どもはなぜその状態にあるのか、については問題にされていない。

しかし、実際には学校で授業を受ける前にすでに生徒にはその教科に対する好き嫌いのイメージや学習土台がある子どもが少なくないことから、日常知の学習の場としての「日常生活」の環境は学習意欲形成の重要な要因であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点を明らかにすることである。

(1)・親子(家族)関係の良好さ、親子(家族)共有行動や会話の頻度、日常生活スタイル、親(家族)の趣味や信条等から学習意欲の形成は影響を受けているのか。

・家族員等、周囲の人のどのような働きかけが各教科を好きにさせるのか。

(2)一度好きになったものを突き詰める日常的な習得方法、必要な環境、条件とはなにか。

3. 研究の方法

(1)質問紙による、家族関係と各教科への興味・関心形成に関する調査

(2)趣味行動などを題材とした、自主的な学習活動の分析

(3) (1)の家族や日常生活から形成される学習意欲の分析と、(2)の個人の学習行動分析から得た継続性を組み合わせ、家庭教育と学校教育の学習土台作りになどの働きかけがよいかを考察。

4. 研究成果

(1) 家族関係と各教科への興味・関心形成に関する調査

①家族との関係性(家族イメージ)調査

(質問紙調査)

子ども達は家族に対して好印象を持っている＝関係性が良い、受け入れられる状態にあるか調べた。教科学習を終えた大学生男女716名を対象に行った調査の結果を総合すると、「家族」集団や家族に関する言葉に対してのイメージは男性72.3%、女性83.9%でプラスイメージを示しており、マイナスイメー

ジのみを持つ者は男女ともに1%以下であった。また女子は男子よりプラスイメージが高かった。

②家族から受けた教科の興味関心に関する調査 (時代比較を含む・質問紙調査)

家族の影響を受ける土壌があることを受け、教科別の影響調査をした結果を受けて、調査を女子大学生に2010-2011年に実施した(200名配布、196名回収)。どのような家族の行動が教科への興味を高めたかを答えてもらった。対象教科は国、数、理、社、英、体、技、家、美、音、書である。

結果、ある教科に対して、親が教科自体を好き・近い趣味の人が居る・関連本がある・関連TV視聴がある・本の読み聞かせがあるという場合子どももその教科を好きである傾向がみられた。具体的には次のような結果が見られた。約40%の生徒が「親の趣味を親と一緒にいううちに内容が関連する教科を好きになった」と回答していた。(例：親がテレビの歴史番組をよく見る＝歴史がすき)。また、例えば国語が好きな生徒には、「本を読んでくれた」の回答が多かった。しかしその「本」は親の持っている本や図書館の本である場合が多く、特別なお金をかけずに行っていることがわかった。

また、12%の生徒は親の職業に関する教科に興味を持っていた。親の職業に関する科目がある場合はこれが好印象につながる。「親が私に習い事をさせてくれた」は10%以下であり、お金をかけることだけが興味を助長するのではないことが示唆された。

教科としては最も多く家族から影響を受けていたのは体育で、次が家庭科であった。家庭科に関する習い事をする子どもや生徒は極少ないため、家庭内の教えや体験の影響であると言えよう。

これらの結果から、子どもが教科に興味を持つようになるための家族の行動は、親が自分の興味があることを子どもと一緒に日常的に行い、知識や技術を習得する楽しさを伝えることが、子どもによい影響を与えるといえる。また約20年前の調査と比較した結果、約20年前の日本は景気がよく教育費も多かったが、親の子どもへ関わり方は同じであり、景気の影響を受けないことも明らかとなった。

(2)好きなこと・自ら選んだ学習に対する意欲・姿勢・目的意識に関する調査

①趣味活動に対する姿勢・意欲・情報取得方法などに関する調査(聞き取り調査)

インタビュー形式にて具体的技術を習得する趣味(習い事)の人と、情報を収集し人と集うまたは鑑賞する趣味の人約20名を対

象とした調査を実施した。好きなこと、どのようにその技術を高めているか（習得方法・情報収集と展開方法）、到達したい目標を尋ねた。

同時期に、大学生における選択授業と意欲に関する質問紙調査を実施し、結果を得たためこれも参考にした（浅野 2010）。この調査は名古屋市内在学の大学生約 100 名を対象として行った質問紙調査である。結果、興味を持っていた科目では達成意識も高く、興味を持てなかった科目は低い学生のほうが多かったこと、また選択科目である語学について、高い達成目標を持っていても対象の難易度が高いと努力をしたが達成感が持てない場合があることも明らかとなった。

2つの結果を総合した結果、選好の阻害要因として、未知の対象自体のおもしろさ・良さに関心を示して触れても、同時または事前事後に否定的な事象（同席の人間関係上で嫌な思いをするなど間接事象も有）が起きると対象自体を拒否するようになるという場面影響があること、反対に選好の促進要因として、対象の習得に強い目的意識があると、既習集団よりレベルが遅れていても劣等感ではなく既習集団に効率的な方法の伝授を求め、既習レベルに追いつくべく自ら学習・吸収するようになり、自ら反復学習を行うという「人的環境」の影響があること、目的意識が明確である、難易度が達成感に影響があることがわかった。

学校での決められた学習と違い、趣味などの自発的な学習を行う場合は、生活への必要度、自負や自己表現としての目的意識、頻度と刺激の強さ、家庭内資源・文化資本、学習対象の内容が「実技」か「鑑賞」かの違い（対象に“なりたい”か”なれない”かの違い）、学習内容の高尚意識、仕事への連動によって、到達目標の設定（もっと極めたい【究極】>学習課程を到達・完了したい/友人のレベルに追いつきたい【到達】>学習達成感を得たい【達成】>義務感で学習した【義務】）や学習や目的意識の持続と喪失等に影響を与えている傾向がみられた。対象になりたいか、なれないか、というのは、趣味の結果として自分が演者・発表者として技術を披露したり主体的に行ったりする側に立つ場合と、あくまでも「観る」こと「知る」ことが趣味の目的であり、本人が実施することに目標がない場合の違いのことを指す。いずれの条件も、不足すると程度が減少するが、元来の到達目標の設定の高さが異なるため、満足度はこれに比例しない傾向が見られた。また、本人の取り組み方が主体的か受け身かによって、趣味を同じくする「集団」を求める場合もその集団へ求める目的が異なるようであった。

これらの結果は家族員や教師の学習意義の伝え方によって、学習者が学習に向かう意

欲や目標設定に大きく影響することを示唆していると考えられる。

つまり、各学習内容をどこまで習得したいと考えるかという到達目標の形成、対象を習得する目的意識の形成に家族がどのように関与できるかによって、その後の学習意欲と満足度に影響があると言える。よって、教科学習の内容が生活上どのように役立ち、何ほどの程度出来ることがどういった意味を持つかという説明の働きかけがあるとよいのではないかと推測される。また、その意識を形成すると同時に、楽しさの伝達や物的資源環境が行われるとよいと考えられる。

③将来の目標とその具体的なモデル（到達モデル）に接し情報を得ることによる目標意識と課題設定への影響をみる調査

（インタビューによる調査を用いた実験）

大学生 27 名（2010 年）、46 名（2011 年）を対象に、将来の職業モデルに対して職業の概要のみならず、人生の先輩として生き方、職業に就くための学習・準備などについて到達モデルに学生がインタビューを行うことによって、どのように将来像の形成や職業への意欲、その職業につくための現在の課題の発見などについて対象の学生の考え方がどう変化するかを実験的に試みた。

その結果、目標モデルが具体化するほど、つまり、具体像としての調査対象に直接話を聞くという体験をすることによって、職業や将来の生活に辛いことやマイナスイメージのある要因を見つけても、目標設定（将来の希望）はゆるぎにくく、さらに将来に課題があることが具体的に見えたことによって、現在から何を習得しておくべきかという、自ら取り組む課題に気づき、目標に確信をもつことがわかった。

この結果は、自分が到達すべき具体例をみてその到達への問題点を具体的に知ることが、自発的に学習する意欲を生むことをあらわしていると考えられる。教科内容に応用するならば、学習内容の難しい部分もあらかじめ伝え、それでもその先にある学習内容の楽しさや学習意義について伝えることの重要性を示していると言える。

(3)まとめと課題

親が自分の興味があることを子どもと一緒に日常的に行い、知識や技術を習得する楽しさを伝えることが、子どもにより影響を与えていた。また、興味関心の形成と持続には本人の持つその学習内容への到達目標意識が影響しており、その到達目標は具体的なイメージ形成、生活への必要度、頻度と刺激、家庭内資源・文化資本、対象が実技か鑑賞か、内容への高尚意識、仕事への連動等を子どもに話し、イメージを作ったかが関わっている

ことは明らかとなった。これらをどう家族が働きかけた上でさらに知識の習得に好印象を与えるかで学習意欲が影響されると考えられた。よって今回は分析の問題点と影響内容は得られたが、具体的な家族の行動の子どもへの具体的な影響については言及に至らなかった。③の結果にあたる、具体的な結果の提示という視点についても、①の調査では想定していなかったため質問しておらず具体的な家族の行動への読み替えが難しい結果となった。

<今後の課題>

教科関連資源の実施、到達目標維持のための具体的意義の設定、否定事象の除外の必要3点の結果を教科教育へ応用できるととそれぞれの調査を行ってきたが、総合する段階になって当初考えていた、家族による教科学習に対する興味関心を育てる要因の有無だけでなく、本人の持つ到達目標への家族の影響を調べ、目標の高さの形成に家族がどのように関わったか、それを設定するのに家族が影響しているか、内容への高尚意識の形成に家族は関わっているか、などについても尋ねた上で物的・人的働きかけを尋ね、分析する必要があることが明らかとなった。

また、金銭をかけるばかりが教科内容への興味関心や技術の向上に役立つのではないこと、時代の影響を受けにくいことも明らかになったが、これも習得内容によって違いがあることが推測された。よって技術と知識を分離して分析する必要があることが分かった。

さらに、調査回答者の回答に「もともと好き/嫌いだった」が少なからず見られたことから、「もともと」に隠された家族の影響を追究して調べる必要があると考えられた。

ゆえに、本研究の結果をまとめるためには、家庭にある条件の有無だけでなく、上記の結果を踏まえ、加味した再調査を実施し、追研究をする必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①室 雅子、「ライフコース選択へのキャリアモデルインタビューの有効性」、教育学部研究紀要、査読無、第5号、2012、pp125-136

②室 雅子、「大学生の持つ家族イメージ」榎山女学園大学研究論集、査読無、社会科学編第40号、2009、pp207-217

[学会発表] (計3件)

①Masako MURO, "The image of the family and a family-related education effect", Asian Regional Association for Home

Economics, 12.12.2009, Pune (India)

②室 雅子「教員養成学部におけるキャリア教育」(本研究結果を一部活用) 日本家政学会、2011.05.29、和洋女子大学

③Masako MURO, "Influence of family activities on stimulating their children's interest in school subjects", International Federation For Home Economics, 16-21 July.2012, Melbourne (Australia)

6. 研究組織

(1)研究代表者

室 雅子 (MASAKO MURO)

研究者番号 : 50329645

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし